

# 中国・中国人民大学と呉玉章（一八七八—一九六六）初代校長

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学政治経済学部 公開日: 2011-04-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 土屋, 光芳 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/10193">http://hdl.handle.net/10291/10193</a>

# 中国人民大学と呉玉章（一八七八—一九六六）初代校長



土屋光芳

私は一九九五年三月末から一九九六年一月までの十カ月間、北京にある中国人民大学に客員研究員として滞在し、その間、研究テーマの「国民党政権と汪精衛」について、大陸中国における研究成果とその現状を把握することに努めてまいりました。

中国人民大学の簡単な紹介については、既に「明大組合ニュース」（一九九六年六月二一日）の第二一九号の「世界の大学をたずねて」でも書きましたので、ここでは、この大学の歴史と特徴に加えて、初代校長の呉玉章について論じてみたいと思います。

まず、中国人民大学の歴史に簡単に触れておきましょう。中国人民大学は、その前身が一九三七年に創設された陝西公学であり、中華人民共和国成立の直後、さらにその他の三つの大学（華北連合大学、北方大学、

華北大学）を統合して、一九五〇年、北京に創設されました。建国後、最初に作られた大学であったことからしても、その設立目的が社会主義中国の建設を担う幹部を養成することにあつたことは明白です。実際、初代校長に任命された呉玉章は開校記念日の式辞で次のように明言しています。

中国人民大学が養成すべきものほどのような幹部なのか。それは、先進の科学技術に精通し、科学的社会主義のため、すなわちマルクス・レーニン主義の知識と毛沢東思想によつて武装され、それらを各種の具体的な業務に結びつけ、かつまた人民民主主義の祖国を防衛する決心をし、新民主主義の建設に忠誠を尽くし、将来、共産主義の事業のために奮闘する心構えを備えた幹部である（「在中国人民大学開

学典礼上の講話」、「吳玉章文集」上、重慶出版社、一九八七年、四一八ページ。

もつとも、文化大革命の時期は、一九七〇年に中国人民大学も、一時閉鎖の憂き目にありますが、一九七八年には大学としての機能は回復され、今日に至っています。

中国人民大学は、一般に、創立当初から新中国における社会科学系の総合大学としても優秀な大学の一つとして知られており、実際、卒業後はいわゆる国家公務員への道を進むものが多かったようです。しかし、文革後の「改革開放」政策とともに大学で新しい社会科学の知識（特に近代経済学、法学等）を習得することができた学生たちは、国家公務員の他にも、民間企業や外国との合弁企業に就職するものがますます増える傾向にあるといわれています。

次に、大学の構成をみますと、十の学院（カレッジ）と二四の学部からなっておりますが、中国人民大学は医学、工学等の理科系の学部をもたない人文社会科学系の総合大学としての性格を備えていることが明白です。さらに、学部の編成内容をみると、改革開放経済と社会主義体制の二つの特色を合わせ持っている

ることが指摘できるように思われます。前者の改革開放経済と関連しているのは、経済学院の経済、国際経済、財政金融の三学部、工商管理學院の工業経済、投資経済、農業経済、土地管理、貿易経済、商品学、会計の七学部に窺われるでしょう。後者の社会主義体制と関連しているのは、哲学、中共党史、国際政治がそれぞれ独立の学部となっており、計画統計學院（国民经济管理、統計学の二学部）が設けられていることでしょう。



盧溝橋での筆者

ところで、汪精衛の生きた辛亥革命前後から日中戦争終結ころまでの中国の歴史を研究しています私は、一九五〇年から一九六六年に死去するまで中国人民大学の初代校長（日本の学長にあたる）を勤めていました呉玉章という人物にとくに関心をもちました。

呉玉章は一八七八年に四川省に生まれ、一九〇三年に日本に私費留学し成城中学に入学いたします。この時、多くの中国人留学生と同様、革命運動に引き付けられ、孫文の中国同盟会に入ります。かれは当時の汪精衛について「『評判』はすこぶる高く、とうとうとまくしあげるかれの弁舌、人の心をひく顔、それに、かれの得意な扇情的な文章」だったと評しております（呉玉章『辛亥革命』（日本語版、北京外文出版社、一九六四年）。一方、呉は汪精衛のように孫文と同じ広東人ではなかったせいでしょうか、同盟会と適度な距離を保っていたといえると思います。一九〇六年に成城中学を卒業すると、岡山の第六高等学校（旧制）に入学します。一九一一年には黄花岡起義に参加し失敗、その直後、日本に戻りますが、十一月の辛亥革命勃発とともに帰国、四川省の革命運動に参加しています。

一九二二年の中華民国成立後、呉玉章は総統府の秘

書処総務科科长に任命されますが、袁世凱の反対党弾圧をきっかけとして孫文の第二革命に参加し、失敗します。しかし、一九一三年十一月にはフランスに留学することになります。一四年の秋、パリ法科大学に入学し政治経済学を研究しています。一五年には蔡元培等と協力して「勤工儉学会」を組織し、中国人にフランスで働きながら勉強することを奨める運動を行っています。

一九一八年に帰国すると孫文の広東軍政府に参加し、成都の高等師範学校の校長になります。この頃から国民党から離れ、極秘のうちに中国青年共産党を組織し、二五年には中国共産党に入党すると同時に、重慶で中仏学校を始めています。二八年にはソ連に渡り、日中戦争が始まって国共合作が再び実現したあとの一九三八年までソ連やフランスに滞在し帰国しませんでした。帰国後、三八年の十月には中国共産党中央委員に選出され、四一年には延安大学校長に、四八年には新設された華北大学校長に、五〇年に中国人民大学校長に任命されています。五四年には文字改革委員会主任に任命され、五六年には、全国人民代表大会代表となりその常務委員会委員に選出されています。

このように呉玉章は日本留学の時期に孫文の革命運動に参加しながら、革命後はフランスに留学、その後、共産党に加わった人物といえます。また、かれの活動範囲は、どちらかといえば第一線の政治活動というよりも、教育宣伝活動に限定され、とくに文字改革に尽力し中国語のローマ字表記を進めるといふ功績を残しています。中国人民大学では尊敬と親しみを込めて「呉老」とよばれ、老革命家としては幸いなことに「文革」前の、一九六六年十二月十二日に北京で死去します。

(助教授・政治過程論専攻)